

「国際交流」雑感

竹村 憲 一

（女子大学
国際交流センター所長）

「同志社時報」九八号に掲載予定の座談会が八月下旬にありましたが、そのときやむおえず欠席することになりました。その後、座談会の司会でおられる釜田泰介先生（大学国際センター所長）と「時報」編集担当者の方から誌上参加あるいは別途「国際交流」について何か書くようにということでございました。

いろいろとご迷惑をおかけしたことで、それに仰せの通りになければ、今後の会合などで淋しい思いをせねばならないだろうと考えまして、おそろおそろのペンをとって、ある次第でございますが、正直のところ、何を書いてよいものやら、さっぱりですが、とりあえず、座談会のテーマでもありました「国

際交流の意義」みたいなことを、われわれ女子大学の現状などに触れながら、ごくインフォーマルに述べることによつて、「罪ほろぼし」をさせていただきます。

現在私達の女子大学には夏期海外研修プログラムが七種類、一年間の交換留学生の協定大学が七校ありますが、私達の規模（学生総数四五〇〇名）の女子大学の中では突出した国際交流プログラムだと思います。これだけの種類のプログラムがありますと、もう少し整理しなければと思わないでもありません。しかし一方、これから先一八歳人口が減少して、いわゆる大学の「冬の時代」に突入していきますと、「生き残り」をかけて、シビアな

現実を乗り越えるため、大学の改革が要求されるわけですが、そのような場合「国際交流」プログラムは、困難な時代を乗り越えるための一つの手段になり得るだろうと考えます。

いうまでもないことですが、私達の女子大学では、国際交流は現在学生や父母の最大の関心事の一つであり、父母の会合などでも必ずといってよい程、国際交流に関する話題が出ます。また、大学の授業料も今までのように引き上げていくことは、これからの社会、経済状況を考えますと困難になっていきます。

すると国際交流がこれまで通り国庫補助金の対象になりますので、授業料ばかりに頼らず、国際交流プログラムを更に発展させていくことによつて補助金を得、大学の経営の面にも何らかの貢献ができるのではないのでしょうか。

次に、学生の視点から国際交流を考えますと、国際交流を通して学生は global aware-ness のチャンスをできるだけ多く経験し、自分とは異なる文化や思考やライフスタイルを通過することによつて豊かな内面性を養うことが可能なのです。そして、やがて豊かな内面性を伴う国際感覚を持つ学生が同志社を

代表し、世界に向って飛躍していくことでしよう。もちろん、われわれの学生のみならず、global awarenessを経験させるだけでなく、アジア諸国、英米、環太平洋などの地域から留学生を招き入れ、同志社、京都、日本を理解してもらい、同志社で学ぶ喜びを与えることも必要であります。

最後に、国際交流が真の意味で意義深いものであるために、私達が自覚的であればならないことを簡単に考えてみましょう。それはまず交流の相手（環境、文化、言語など）が自分とは異なる他者であるということです。つまり、言葉や、習慣、価値観などの相違はもちろんのこと、自分が一生懸命理解してもらおうと努力しても理解してくれないとは限らない相手、簡単にいえば、自分の思い通りにはならない、見通すことのできない他者。しかし、それでいて自分にとって魅力的存在であるものが、交流（コミュニケーション）の相手だということです。このような他者と対峙することによって、私達は自分を活性化できるのではないのでしょうか。この自明といえば、自明のことを再確認することが肝要だと思います。

東京美術学校の設立者である岡倉天心（一八六二—一九一三）は、あらゆる多様性を許すような同一性、つまり、彼の言葉でいえば「愛」ですが、そのような愛の心の必要性を説いたと記憶しておりますが、国際交流は異質な他者と出会い、その世界を通過していくことによって、「愛の心」を発見し、それを自分の内面にとり入れ、内面の充実性をはかることだと考えております。

